

令和7年度 第2回 生駒市公益活動アドバイザー会議録

開催日時 令和7年9月5日(金) 13:30~15:30

開催場所 生駒市市民活動推進センターららポート研修室

出席者

(アドバイザー) 佐藤由美氏、田中晃代氏、土坂のりこ氏、山納洋氏(五十音順)

(事務局) 市民活動推進センター所長 大垣、主査 高田、係員 西田

(傍聴者) なし

案件

- 1 令和7年度 生駒市地域活動応援補助金「まちのわ」進捗状況報告
- 2 令和8年度 生駒市地域活動応援補助金「まちのわ」の運用について
- 3 令和7年度 主催事業の進捗状況報告

以下、発言要旨

案件1 令和7年度 生駒市地域活動応援補助金「まちのわ」進捗状況報告

(1) 生駒南第二小学校 果樹園プロジェクト

【事務局から報告】

(アドバイザー) この団体は地域の方の参加を促しながら活動されているので、そのやり方を他の地域に共有する場を持てるといいと思いますが、ヒアリングはされていますか。

(事務局) 6月に地域コミュニティ推進課が自治会活動の見学会を実施しました。果樹園以外のプロジェクトも紹介され、参加者も多かったと聞いています。

(アドバイザー) そういった波及効果も含めて、この団体の知見が、どのように地域に生かされたのかも報告書にあるといいですね。

(アドバイザー) 夏祭りでのプロジェクトの紹介をされたとのことですが、当日の参加者数は把握されていますか。

(事務局) 現時点で詳細は把握できておりません。ただ、これまではプロジェクトの目的や活動内容が地域の方々には分からない状態でしたが、夏祭りの場でプロジェクトとして紹介され、小学生らにも伝えられました。

(アドバイザー) 地域の方に協力していただくことが一番の目的だと思うので、何人ぐらい協力されたのか、何人参加されたのかが分かるといいと思います。

(アドバイザー) 地域内や他団体の連携といった横の繋がりがみたいなのが生まれてきているようであれば、それも評価対象だと思います。いかがでしょうか。

(事務局) 果樹園プロジェクトの代表がシフクノプレイスさんの活動に参加され、今後の連携策を検討中であると聞いております。また実施されたら報告いたします。

(アドバイザー) 来年1月に6年生のレモンケーキ作りがありますが、関係してくるのでしょうか。

(事務局) 小学校が主体になって行われると伺っています。今後連携できれば広がりが期待できると思います。

(2) 一般社団法人 IDS

【事務局から報告】

(アドバイザー) 課題は「自治会のお祭りにどう入り込めるか」でしたが、予想以上に多くのお祭りに参加している印象です。ただ、実際に何をしているのかは見えにくいように思います。販売スタッフが広報も兼ねているとのことですが、どのように広報され、市民がどう受け止めたのかが分かりづらいです。そのあたりを教えてください。

(事務局) 市民からの具体的な反応は今後伺っていきたいと思っています。ただ、まずは自治会の中に入っていく努力されていること自体に敬意をもって、どんな声があったのかを確認していきたいと思います。

(アドバイザー) チラシを広報に使っているようですが、「まちのわ採択事業」とか「市と連携している」といった公的な位置づけは示されていますか。

(事務局) チラシには「まちのわ補助金採択事業」と明記されています。また、キッチンカー仲間に災害支援を呼びかけるなど、仲間づくりの内容も盛り込まれています。

(アドバイザー) その取り組みが反響を呼び、秋のお祭りとの連携につながったのでしょうか。

(事務局) 事業計画に「広報チラシ作成」を位置づけており、祭りで配布することで周知を図られました。チラシを用意し、自治会と折衝して参加につなげる流れです。

(アドバイザー) 単にキッチンカーの販売促進と見られない工夫が必要ですね。

(事務局) 11月1日の「市防災宿泊訓練」で夕食提供を担当予定です。こうした場面で活動内容が見え周知できることを期待しています。

(アドバイザー) そうしたことを、市の広報に取り上げてもらうと周知が広がりそうです。ところで、出店は商売と見なされませんか。

(事務局) 8月の「どんどこ祭り」では、キッチンカー出店を取りまとめる役を担いました。その際、防災テントを設けて販売とは別に防災支援を行っています。

(アドバイザー) 9月以降のお祭り参加は、チラシ配布だけか出店も含むのか、どういう形ですか。

(事務局) その点は今後確認していきたいと思います。

(アドバイザー) 市民にどう見えているか、公益活動として認識されているかが大事です。

(事務局) そのために災害支援団体であることを示すテントやピンク色のビブスを作られました。ただ、公益活動としてどう周知していくかは引き続き確認します。

(アドバイザー) チラシの現物はありますか。活動が見えにくいので、例えば炊き出しメニューや特徴、障がい者や高齢者への対応などをチラシに具体的に示すと良いと思います。また準備しておいてください。

(事務局) わかりました。

(3) NPO法人こどもゆめひろば

【事務局から報告】

(アドバイザー) 活動場所の確保が難しいというのは、この団体に限らず全国的な課題だと思います。行政としては、活動者が孤軍奮闘せずに場所を確保できるような仕組みを考えているのでしょうか。

(事務局) 学校や公共施設の利用希望は高まる可能性があります。ららポートができるのは公共施設の予約方法の案内程度で、それ以上は教育委員会やスポーツ担当課に確認が必要です。

(アドバイザー) そうですね。こういう案件が増えれば、対処療法的に個別対応するしかなくなります。本来は団体に「こういう状況になるので、こういう方法をとった方が良い」という方向性を示せばいいのではないかと思います。

(事務局) 少し補足をしますと、中学校部活動の休日の地域移行を担当する教育委員会やスポーツ振興課等では、生駒市の新たな地域クラブ活動の方針に基づき、準備できたものから休日の部活動の地域移行を進めています。たとえば、水泳クラブやサッカークラブ、レスリングクラブなど、実施団体が決まっており、市と地域が協働する形で進められています。ただし、それら以外の民間の文化芸術団体などについては、活動場所の確保や運営支援などで課題が残る可能性があります。

(アドバイザー) なるほど。つまり中学校の部活動以外の民間クラブ活動などをどう扱うのか、包括的な指針が必要だということですね。

(アドバイザー) 市の全体方針があって、そのカバーできない部分を住民が担い、行政がどう支援するかという形が望ましいですが、大前提の部分がまだ見えにくいので、支援の範囲を議論するのが難しいと思います。

(アドバイザー) 民間の活動になりますので、本年度は持ち出しでやっていただくしかないかもしれません。ただ来年度以降、継続できるかどうかの判断が必要です。その際には撤退ではなく、政策提言につなげられる形がよい。例えば、中学校の地域移行クラブではないものの、少子化で単独では維持できないクラブを民間が担う可能性について、市と協議できるテーブルを作るなど、サポートが必要だと思います。

(アドバイザー) また、ハンドボールの件もありますので、後の議題で改めて議論できればと思います。いずれにせよ、市役所内での位置づけをどう整理するかは、ここで結論を出す話ではないかもしれません。

(4) シフクノプレイス

【事務局から報告】

(アドバイザー) このプロジェクトでは、シフォンケーキの販売は必須だったでしょうか。

(事務局) 代表がシフォンケーキの講師をされていることもあり、当初はシフォンケーキをメインにと考えておられていました。ただ団体としては「美味しいものを提供したい」

という思いが第一ですので、調理場所の確保が難しい場合は、マフィンやパンなど別の方法で提供することも検討されています。

(アドバイザー)概ねうまくいっている印象です。大きな課題はなさそうにみえますね。

(アドバイザー)素材へのこだわりから材料費がかさむ課題があると伺いました。もう少し説明していただけますか。

(事務局) 代表は「美味しいものを出すことでリピーターが増える」と考えており、小麦粉やコーヒー豆など材料にこだわっておられます。そのため収入とのバランスをどう取るかが悩みどころです。

(アドバイザー)美味しさの追求は理解できますが、例えばアレルギー対応や健康素材の工夫など、こどもたちにとっての安全性や学びにつながる面もあると良いと思います。価格や食材のバランスをどう考えるかも教育の一環として意識できるといいですね。

(事務局) 現状は大人がメニューや材料を決めていますが、今後はこどもたちも意見を出し合える環境をつくりたいと考えられています。

(アドバイザー)第1回はワークショップを実施されたようですが、第2回はどうでしたか。

(事務局) 第1回はおしごとキッズのメンバーに中学生がいたため、ワークショップを実施されましたが、第2回は小学生のみの参加で、かつ会場の都合から開催できなかったようです。

(アドバイザー)今後の方向性として、もしワークショップを強めるならシフォンケーキ以外でもよいでしょうし、美味しいものを食べに来てもらうのを重視するなら大人も巻き込める場にしたい方が良いと思います。3回目、4回目と続ける中でバランスが明らかになるといいですね。

(5) スキマダンスクラブ

【事務局から報告】

(アドバイザー)課題の中で「参加者を増やすことが目的ではなく、継続に意義がある」とありますが、どういう意味でしょうか。

(事務局) 6月は参加が2人しかいなかったため、補助金を使われる以上、もっと多くの方に届けられないかと広報を促しました。しかし、「人数が増えると安心して来られなくなる」と感じておられました。継続にこだわっておられるというよりは、広く広報することを躊躇されているというニュアンスです。

(アドバイザー)難しいですね。助成金は公益性のある活動を支援するものなので、多くの人に参加してもらうことが基本ですが、広げると難しくなる面もあるわけですね。

(事務局) その通りです。そこで秋に広報紙に掲載したり、チラシを置いてもらえる場所を探したりするなど、少しずつサポートをしているところです。

(アドバイザー)少人数でも回数を重ねる方法もありますし、税金をいただいている以上は広げていく努力が必要だと思います。

(アドバイザー)ただ、居場所は一つで万人に合うものではありません。当事者が選べる場が複数あることが「開かれている」と言えるのではないのでしょうか。その意味では盆踊りの開催などは「開いた」活動と評価できます。市の伴走については、無理にハンドリングせず遠くから見守るのも一案かと思います。

(アドバイザー)不登校といっても、夜型でゲームをする子や部活には出られる子など多様です。一人ひとりが自分を見つめ直す機会を持つことが公益性になるなら、人数が少なくても意義はあると考えます。そうした場をつくれること自体を公益的と見てもよいのではないのでしょうか。

(アドバイザー)参加費は毎回 2,000 円ですが、盆踊りは無料でしたか。

(事務局) そうです。

(アドバイザー)無料なら多く集まるが、有料だと来にくい。もし参加費を 1,000 円にすれば2倍来るのかなど、料金設定も鍵になるかもしれません。公益性を高める一方で、合わなければ自然に来なくなることもあると思います。実態が分かるとよいですね。

(6) 真弓ロビンス

【事務局から報告】

(アドバイザー)伴走支援で「すぐーる」による広報支援を行ったとありますが、これはららポートの職員が教育委員会に掛け合ったという理解でよろしいですか。

(事務局) その通りです。

(アドバイザー)素晴らしい。効果がでるといいですね。

(事務局) 私たちも9月に2回体験会がありますので、参加者数や反応を楽しみにしています。本アプリは児童ではなく保護者向けに発信している点がポイントです。

(アドバイザー)素晴らしいですね。

(アドバイザー)吹奏楽やハンドボールと同様に、定期的に活動できる場所を確保するのが課題であることが見えてきました。質問ですが、この団体は大会での成績を目指すなどの方向性を持っているのでしょうか。地域移行との関係性はいかがでしょうか。

(事務局) 試合を組むには7名必要ですが、現状は人数が足りません。大会で勝つことよりも、中学生以上の受け皿を絶やさないという強い思いから設立された団体です。

(アドバイザー)その団体が「どうなりたいか」を共有できると、伴走もしやすいと思いました。

(アドバイザー)選手コースとスクールコースがありますが、違いはどうなっていますか。

(事務局) 中学校のハンドボール部に所属している人は当団体の選手コースには登録できません。スクールコースは練習の場で、選手コースは大会出場を目指すものです。ただし大会に出るには7名必要で、現状は5名不足しています。

(アドバイザー)来年度からの中学校部活動の休日の地域移行の影響で、こどもたちが真弓ロビンスに流れる可能性はありますか。

(事務局) 代表からはその可能性があるかと聞いていますが、不透明です。

(アドバイザー)施設利用料はどうなるのでしょうか。

(事務局) 担当課に確認しておきます。

(アドバイザー)よろしくお願いします。

(7) 一般社団法人 和草

【事務局から報告】

(アドバイザー)いくつかの課題が見えたと思います。例えば、農作業を加工販売までつなげたいが、その段階にどう進めるか、どんな商品を加工するのか、それをできる人や設備はどこにあるのかなど、課題を小分けにすれば答えが見えてきます。どう連携すればいいのかも、課題を砕いていけば見つけれられるのではないのでしょうか。

(アドバイザー)課題を小分けにすれば、その背景や葉脈のような構造が見えてくるという指摘だと思いますが、いかがですか。

(事務局) 課題を小分けにすると、作業レベルで分けて可視化するという理解でよろしいのでしょうか。

(アドバイザー)困っていることは書かれているけれども、漠然としているために解けない「罫」に陥っているように見えます。「何ができなくて困っているのか」「何を知らないから困っているのか」と分けていけば、答えが出やすくなると思います。

(事務局) 今年度から特定非営利活動法人きょうと NPO センターに委託して「専門家相談」を始めました。実は、このアドバイザー会議のあとに和草さんが相談をされる予定で、内容は「何を課題にすればよいかわからない」というものです。ここで明確にし、活動を進める手がかりを一緒に考えていきたいと思います。

(アドバイザー)「農作物を加工販売したいが、何をしたいかわからない」という点が気になりました。地域には道の駅や企業、店舗もあります。やりたいことを示すことで連携のきっかけが見つかるのではないのでしょうか。サービスを提供する側としても、いろんな主体とつながれる仕組みを考える必要があると思います。企業も含めた主体と連携するために視察などを検討しても良いのではないのでしょうか。

(アドバイザー)和草さん自身は他の事業にも関わっているので、事業全体を見る視点を持ってもらえると思います。ただ、「大人」が対象は経験値が少なく難しさがあるのではないのでしょうか。こどもなら親が参加費を払ってくれるが、大人は自分で払わなければならないのでハードルが高い場合もあります。「大人」の定義を試みるのも一つの方法だと思います。

(8) おはなしかい、奈良

【事務局から報告】

(アドバイザー)命の素晴らしさが伝わる展覧会になりそうですね。

(アドバイザー)課題として「産後うつによる自殺」が挙げられています。であれば、その問題の背

景や、知ってほしいこと、どうアクションを起こしてほしいかを書き出すと、目的と手段が整理できると思います。

(アドバイザー)今は手段が優先され、目的が後回しになっている印象を受けます。ただ、市民活動がこのプロセスを経て、3～5年後に「自分が本当にやりたかったこと」に気づかれる場合は多くあります。ご自分で気づかれるしかないので、伴走支援としては小手先の助言よりも、見守ることが大切だと思います

(アドバイザー)補助金で守るべきは「お作法」です。経費の精査や積算の仕方などはしっかりサポートしてください。

(アドバイザー)成果が産後うつ予防につながったかどうかは、もっと先の評価です。今の段階で焦る必要はないと思います。

(事務局)わかりました。ありがとうございます。

(アドバイザー)11月以降に予定されているトークイベントが重要ですね。参加者がどう集まり、どんな気持ちを共有し、どう発信するかがポイントです。職員の方も参加されるのでしょうか。

(事務局)担当者が出席予定です。

(アドバイザー)それを見てから評価すれば良いと思います。

(アドバイザー)このトークイベントの参加費が収入源なのですね。9万円分がトークイベント収入で、音楽ライブは中止になったとのことですが、金額に見合うイベントにできるか、どこをPRして集客するのが公益性判断の基準になると思います。収入を確保しつつ、誰が来場するかを見極めることが重要です。

(アドバイザー)「手段と目的」の話がありましたが、相手が手段で考えているなら、それに合わせて支援するのも大切です。無理に目的でかぶせると、操作されているように感じられることもあります。相手の立場に合わせるのも支援の重要な方法です。

案件2 令和8年度 生駒市地域活動応援補助金「まちのわ」の運用について

【進捗状況を事務局から報告し、アドバイザーに意見を尋ねる】

1 補助金対象活動の範囲・公益性の判断基準について

(事務局)クラブ活動の地域移行についての市の方向性は、担当課に確認し、次回アドバイザー会議で共有します。次に年1回のイベントが申請された場合に継続性の面からどのように判断してよいか、備品購入や広報ツールの作成の申請についてご意見を願います。

(山納氏)準備段階、ボランティアの打合せ、本番、振り返りを含めて積み重ねがあれば、年1回でも十分に意味があります。回数を機械的に基準にするよりも、その活動を通じて学びや変化が起きているか、活動が地域にどう根づいているかを重視すべきです。備品購入や広報ツールについても、物品購入そのものを否定する必要はありません。ただし、「欲しい物だけ得て後は関わらない」といった姿勢の団体であれば不適切です。

補助金を通じて活動そのものとの接点をつくり、団体が伴走支援や学びを受け入れる姿勢を持っているかが大切だと考えます。物的支援と精神的支援を組み合わせることで、公益性のある活動へと育っていくのではないのでしょうか。

(土坂氏) 私も全く同じ意見です。例えば別の地域の事例ですが、在日コリアンが多く住む地域で年1回のお祭りが続けられており、多文化共生のまちづくりがこの取り組みを通じて徐々に形成されてきたという歴史があります。したがって、年1回でも、主体の多様性や関わる人々の意識変化を通じて大きな波及効果生まれ、公益性が高いと判断できるのではないのでしょうか。備品購入についても、一律に否定するのではなく、それが地域課題解決になる理由をロジックとして明示いただけると理解しやすいでしょう。採択の可否は、その利用が活動の効果的な展開に資するかどうかで判断されるべきであり、備品購入そのものが不適切だとは考えません。

(佐藤氏) 備品購入で活動が前に進み、モチベーションや方向性がしっかりしている団体であれば支援してよいと考えます。重要なのは、その購入や委託が活動にどう影響し、公益性に結びつくのかを一件ずつ丁寧に見ていくことです。申請書には地域課題への対応を必ず記載する必要がありますので、備品購入や広報を目的とする場合でも、その目的と公益性が明確に示されていることが条件となります。例えば「高齢者にもできるDIYを広げるため、その技術を伝える活動に必要な機材を購入する」といった具体性と公益性があれば認められるでしょう。一方で、過去には大型の機材を購入したにもかかわらず活動が続かなかった団体もあり、慎重さは求められます。単なる物品取得に終わらせず、申請段階で目的を十分に確認し、活動に結びつくように丁寧にサポートすることが重要です。

(田中氏) 備品購入に関しては、他市事例でも判断が分かれるケースが多いですね。例えば他の自治体でコミュニティカフェの立ち上げで、高価なコーヒーマシン一式を揃えたいという申請があったが、公益性に乏しいと判断し削減した経験があります。また、初めて活動を始める団体が事務用品を大量に申請されたときは、必要最低限に絞って認めました。備品購入そのものが問題なのではなく、申請の内容を一件一件審査し、どの程度認めるかを議論することが重要で、公益性や活動の持続性に結びつくかどうかを丁寧に判断し、適切に削減や調整を行うことが必要だと考えます。

(事務局) 次に、現在は団体のみ申請できるという運用にしていますが、これを個人にも広げていくべきかについて、ご意見ををお願いします。

(山納氏) これまで1人で活動している人は、人を巻き込むことが難しく、活動の継続性に課題があると感じています。少なくとも3人程度が関わっている活動であれば、無理なく運営が続けられることが多いように思いますので、団体を対象にするのは妥当ではないのでしょうか。

(佐藤氏) 組織の定義は本来2人以上で、1人申請を特例的に認めた場合、仲間づくりがうまく進まず、結局「どう仲間を作るか」の助言に終始することになったように思います。最低

でも2人、できれば3人以上という基準を設ける方が妥当ではないでしょうか。

(土坂氏) この2年間の状況を見て、生駒市の場合は3人以上を要件とするのが適切だと感じています。異なる職種や視点を持つ人が集まれば、磁石のようにピタッと結びつき、活動が展開していく可能性が高まりますが、現状はそこまで温まり切っておらず、1人や2人では活動の基盤が脆弱であるように思うので、最低3人以上という線を設けることが望ましいと思います。

(事務局) 次に伴走支援のあり方についてのご助言をお願いします。

(山納氏) 伴走を必要以上に長く・深く続けるよりも、「1年で終わるかもしれない」という可能性を前提に、ある程度は見守る姿勢でよいのではないのでしょうか。

(田中氏) 団体のプレゼンを聞く限り、目的や活動内容は語られていても「目標値」が明確でないケースが多いと感じました。数値的なものでも質的なものでもいいとは思いますが、目標がはっきりしないと、成果や効果を評価することが難しいです。市民活動では往々にして目標が曖昧なまま進むことが多いですが、そこを浮き上がらせるように助言・アドバイスすることが重要ではないのでしょうか。難しさはありますが、あえて団体に目標を設定させ、その達成を目指すよう支援する姿勢が必要だと考えます。

(土坂氏) 成果の捉え方を団体自身に考えてもらう機会を早い段階で設けることが有効ではないのでしょうか。例えば、採択後すぐの7月や8月頃に「自分たちにとっての成果は何か」を話し合い、団体が自ら定義する場を設ければ、その後の伴走支援がしやすくなるでしょう。

(佐藤氏) 申請段階では、現在は提出された申請書に対してコメントを返されていますが、募集段階で「この欄にはこういうことを書いてください」といった事例や記入モデルを提示しておく、団体が早い段階から考えやすくなり、後の指導や修正の負担も軽減されるのではないのでしょうか。書式が毎年少しずつ変わる難しさはありますが、少なくとも「ここは特に重視している」といったポイントを事前に示すだけでも、申請希望者は意識して準備できるでしょう。

(事務局) 次に申請と報告のプレゼンについて、実施すべきかのアドバイスをお願いします。

(田中氏) 補助金プレゼンは、単なる審査の場というよりも「公開の報告会」として大きな意義があると感じます。実際に聴衆として来ている団体や市民が、議論や質疑を聞くことで「次は自分も申請してみよう」と思うきっかけになるからです。プレゼンは団体の必要性を確認するだけでなく、他の団体にとっての学びや刺激の場としての役割も大きいので、積極的にそうした機会を設け続けることが重要であり、外すべきではないと考えます。

(佐藤氏) 補助金において「報告義務」を課すことで、単にお金を受け取って終わるという形を防げるのは意義があります。報告会を公開の場として設けることは重要で、参加した他団体や市民にとっても学びや刺激につながります。申請段階であらかじめ報告会の日程を提示しておけば、後から「日程が合わない」という理由で参加を回避されることを

防げますので、継続していくのがいいでしょう。

(事務局) その他、ご意見はございますか。

(山納氏) 報告会は、単に助成を受けた団体が活動を終えて成果を示す場にとどまらず、次年度以降に応募を考える団体にとっても参考となり、「先輩・後輩」のような関係性を生み出す場として重要です。これによって、生駒市における公益的活動を担う人材の層が厚くなり、継続的な広がりが期待できると思います。独りよがり補助金を使って終わり、という形ではなく、報告会を通じて他団体や市民とつながり、互いの知見を共有し合うことが、市民公益活動を発展させる長期的な仕組みづくりにつながります。特に、従来のボランティア活動を続けてきた人から新たに挑戦する人へと活動が受け継がれていく過程を支えるためにも、この「層を厚くする」仕掛けを意識していくことが大切ではないでしょうか。

(佐藤氏) 単年度で終わってしまう団体が出ることは避けられませんが、その経験を次につなげる仕組みを用意することが必要です。例えば「同窓会的なグループ」を設け、必ずしも定期的な会合を持たなくても、LINEグループなどを通じて情報交換ができれば、団体同士のつながりや交流が生まれます。こうした仕掛けによって、補助金を活用した団体が孤立せずに互いの経験を共有し合い、次の挑戦や新しい活動の芽につながる可能性が広がっていくと思います。

案件3 令和7年度 主催事業の進捗状況報告

【進捗状況を事務局から報告し、アドバイザーに事業の方向性についての意見を尋ねる】

(山納氏)

- ・Canvaのような人気講座を無料で実施すると、多数の参加者を集められるのだろうが、むしろ課題を強く意識している層に的を絞り、少人数や場合によっては有料化することで、学習効果や波及効果を高める運用をすることが望ましいのではないかな。
- ・SNSの活用、メンバー間の連絡、オンライン会議の運営といったICTスキルは、現場で実需が高い。こうした実用的な力を高める講座もニーズが大きいと考えられる。
- ・市民活動に参加する動機づけのあり方については、広域的で抽象的な「困っている人を助けましょう」といった呼びかけには参加が集まりにくいですが、介護や防災など「自分ごと化」しやすいテーマを設定すると参加が伸び、結果的に公益性にもつながる。例として、認知症や介護をテーマにした講座では、介護離職の可能性を抱える人や将来の自分事として関心を持つ人が多く集まり、10人規模だった参加が300人にまで広がった事例がある。また、防災・避難をテーマにすると、自分の命や生活を守る行動が、そのまま他者を助ける公益活動に接続する。したがって、講座や事業のテーマ設定においては、「困っている他者を助けるため」よりも「自分も含めて直面するかもしれない課題にどう向き合うか」を入り口にすることが効果的であると感じる。

(田中氏)

- ・学生は東日本や能登など大きな災害支援には積極的に取り組む一方で、自分の住んでいる地域の課題やボランティア活動には目が向きにくい現状があるように思う。身近な地域課題が見えにくいことが要因の一つではないか。
- ・学生が地域課題を理解し、関わりを持つことは、自分のキャリア形成や当事者意識を育む上でも重要である。大学生は将来のキャリアを考える段階にあるため、地域に関わる体験が自己の成長や学びにつながるような指導や助言を継続的に行っていく必要がある。
- ・今回のボランティア体験プログラムは、大学生に地域の課題を知り、自分ごととして捉える入口になる重要な取り組みである。単なる体験にとどまらず、学生自身が地域を理解し、関わる意味を考える機会として発展させていくことが望ましい。

(佐藤氏)

- ・地域に強い関心を持つ学生はそれほど多くはない。遠方であっても際立った課題に触れることで、自分の地域の特徴を比較的に理解し、関心を持ち直すきっかけになる場合がある。そのため、経験を経て、地元に関心を持てればよいのではないかと。
- ・近年は「共感性の低下」が課題になっている。例えば、こどものことは自分がこどもだった経験から理解できるが、高齢者や障がい者など、自分の経験にない対象には関心を持ちにくい学生が増えている。特にコロナ以降、その傾向が顕著になってきている。
- ・したがって、まずは「自分ごと」として実感できるテーマから入り、徐々に他者や社会課題に視野を広げてもらうことが大事である。入口として「自分たちのためになることをみんなでやる」ことが欠かせず、その先に外への関心をつなげるステップを設計することが今後の重要な課題である。

(土坂氏)

- ・報告を聞いて、市民活動の担い手そのものを支援するだけでなく、市民活動を支える「市民社会」全体を耕そうとしている姿勢が伝わってきた。公設公営という難しい条件の中で、非常に努力をされていると感じた。
- ・一方で、公設公営だからこそできることをもっと尖らせてもよいのではないかと。例えば、学校教育の現場で使っているツールで市民活動を紹介するとか、地域包括支援センターなど他の団体と接続して交流会を開催するといったことが報告されたが、それは民営ではないからこそ実現できる強みである。そうした「ららポートならではの強み」を明確に打ち出し、可視化していくことで、市民活動支援の存在意義をさらに高めることができるのではないかと。